現代日本における
キリスト教葬儀の意義

TCU特別遺贈セミナー

2023年1月28日

大和昌平（TCU神学部長）

1. 日本の伝統的な葬儀の凋落

日本の仏式葬儀の原型は曹洞宗が作った。

南北朝から室町時代にかけて曹洞宗が発展する。

禅の修行道場の経済を維持するために、在家信者に住職にならずに死んだ雲水への葬儀（亡僧葬儀）を提供し、これが各宗派にも広まった。

曹洞宗の「禅苑清規」は中国で１１０３年に成立。
儒教の儀式を定めた「儀礼」「開元礼」の影響受ける。

江戸幕府による寺請制度による仏式葬儀の強制

１660年代に宗門人別改帳の作成を行った。
家を単位として名前・宗旨・檀那寺等を記載し、檀那寺の僧の証明を得て、郡毎に冊帳に纏めた。
後に宗毎に纏め、毎年10月に提出させた。
結婚・死亡等による移動に際し、寺請証文を発行し、寺が役所の役割をもった。
島原の乱（1637年）の後、キリシタンでない証明を徹底させる制度であった。
これにより仏式葬儀は強制されることになった。

「葬式仏教」の存続

明治時代に、仏教を排斥する廃仏毀釈が行われたが、黄泉の国に生まれ変わる神葬祭は定着しなかった。

天皇を国全体の父親とする家父長制度の国となって、各家を単位に戸籍が作られ、家長（戸主）が家族の生活全体を支配するようになった。

家の重要性は増し、仏式葬儀や法要の需要は高まり、仏式葬儀は近代日本においても存続された。

少子多死社会・無縁社会の現在

2025年問題：団塊の世代（1947-49年の3年間に806万人が出生）が75歳以上となり、2000万人が後期高齢者となる。

2012年は126万人が死亡。26年後の2040年にはピークを迎え、死亡数が出生数の2.5倍に膨らむ。

セレモニーホールの進出。1.7兆円の葬儀市場にイオンに続き、FamilyMartも参入。

「自分らしく死にたい」

島田裕巳『葬式消滅－お墓も戒名もいらない－』

（㈱G. B. 2022年6月30日）

『戒名』『葬式は要らない』『０葬』など現代の葬儀の変容を追い続けてきた宗教学者の近著。

「葬式が、曹洞宗において、禅の修行道場を維持するために金銭を稼ぎ出す手立てとしてはじまったということは重要です。（中略）葬式が消滅にむかってきたのも、結局は、葬式がもともとビジネスとしてはじまったからではないでしょうか。そして、ビジネスとしての価値がなくなれば、それは自然とすたれていくことになるのです。」

「家族葬」「家庭葬」「一日葬」「直葬」
「葬式仏教」と縁を切る趨勢。

「私たちは今や、ようやく400年前に生まれた寺請制度から解放されようとしているのかもしれません」
（島田裕巳、前掲書）

「エンディングノート」2011年
撮影・編集・監督：砂田麻美
製作・プロデューサー：是枝裕和
第62回芸術選奨文科大臣新人賞
日本映画監督協会新人賞他受賞

「エンディングノート」は
団塊の世代の猛烈サラリーマンの父の死をドキュメンタリーで娘が撮影した。

癌を宣告されてから、自分自身の死を考え、教会堂でのキリスト教葬儀を願い、実施されるまでを、距離を置いて描く。

- あの教会堂で　→イグナチオ教会
- 騒がしくやってほしくない
- リーズナブルに

「自分らしく死にたい」を実行した父親の死

２．キリスト教葬儀の意義

①．いのちの厳粛との直面

②．悲しみの共有と遺体への敬意

③．復活の希望と天からの慰め

１．いのちの厳粛との直面

　社会儀礼として従い、僧侶の呪文しか聞こえない仏式葬儀。
　教会堂に入ると、牧師の言葉はすべて意味をもって伝わってくる。
　一人の人のいのちと人生が大切に扱われて、いのちを与え・取られる創造主を仰ぐ宗教心がストレートに参列者の心を打つ。

２．悲しみの共有と遺体への敬意

主イエスがラザロの葬儀に行かれた折、「イエスは涙を流され」（ヨハネの11章35節）た。

パウロは、「泣く者といっしょに泣きなさい」（ローマ12：15）との命じた。

悲嘆の中にある友をとむらう（元は訪う）こと、心を込めて「お悔みを申し上げること」

遺体への敬意が古代キリスト教会の基本的態度だった。

身分の低い者は葬儀も埋葬もないローマ世界で、キリスト教会は一般の貧しい人の埋葬を行った。

「無神論〔キリスト教のこと〕をとりわけ広めたのは、他国人への博愛と死者の葬りへの配慮である。」
（背教者ユリアヌス）

日本のキリシタン大名高山図書（右近の父）は身分の低い家臣の死に際し遺体を担ぎ、領民を感動させた。

３．復活の希望と天からの慰め

古代のキリスト者たちは死者の遺体の頭を
キリストが復活された日の朝日の方に向け
復活の希望を形で表した。

「今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである。」
（黙示録14:13）

「まことに、まことに、あなたがたに言います。
　わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています。」（ヨハネ5：24）

　社会儀礼としてキリスト教葬儀に出席する人が、死といのちの厳粛さに、復活のいのちの希望に思いがけなく出会うことになる。
　現代日本においてキリスト教葬儀は福音宣教の大切な機会となるのではないか。